

サメハダヒザラガイ *Leptochiton hirasei* (Is. Taki et Iw. Taki)

【選定理由】

本種は、房総半島から九州の潮間帯から潮下帯の砂底上の転石下に分布する(齋藤, 2000, 2017)とされているが、東海地方では近年になって初めて、伊勢湾湾口部(木村・他, 2015)、三河湾湾口部(早瀬・他, 2019; 早瀬・木村, 2020)からの生息が記録された。

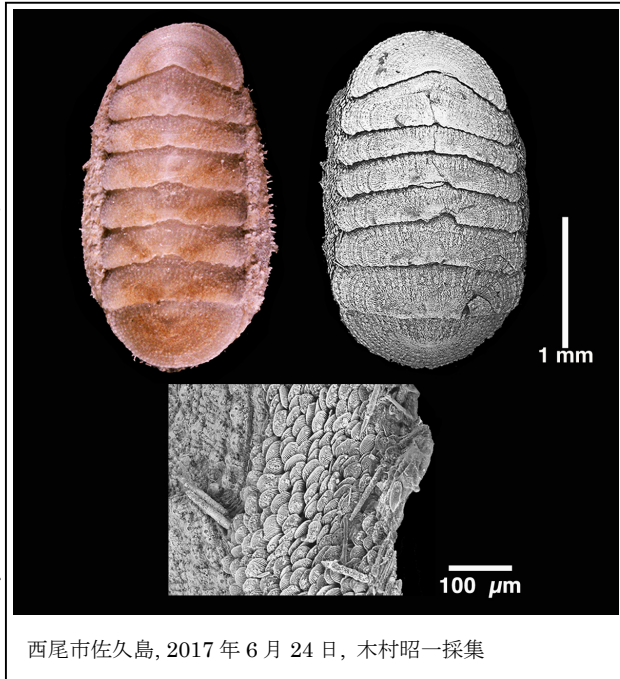
本種はサメハダヒザラガイ目の中では最も小型の種で、他のヒザラガイ類の幼貝と混同されやすい。また、やや深く底質に埋もれた石の下面に付着し、見つけにくく、過去に分布記録がなかったと考えられる。

県下では湾口部から外洋に面した淡水の影響を受ける転石地帯で生息が確認されており、近似種のキタサメハダヒザラガイ *Leptochiton hakodatensis* (Thiele) と比べてやや外洋寄りに分布する。本種の生息地は潮通しの良い内湾域の転石地で、他の貝類多様性も高い。県下での生息地点数、個体数も少なく、絶滅の可能性が高い種であると評価された。

【形態】

体長約 5 mm、サメハダヒザラガイ目としては最も小型の種。キタサメハダヒザラガイと近似するが、本種は殻、肉帯共に白色ではなく、淡褐色から赤みが強い褐色。また体長は遙かに小さく、肉帯の鱗片の形態も異なる。また同所的に生息することの多い普通種のヤスリヒザラガイ *Lepidozona coreanica* (Reeve) の同サイズの幼貝とは、現地では紛らわしいが、殻の彫刻が弱いことで、殻表を拡大して観察すれば、明確に区別される。

本種の殻板は低く、背部は角張らず丸みを帯びる。殻表の顆粒は、頭板、側域、尾板後域では放射列となるが、それ以外は縦列である。肉帯上の鱗片は、先端が丸みを持った長方形で 10 本以上の強い縦肋があり、周辺の棘は長いもので鱗片の 2 倍以上の長さで強い縦肋を持つ。



西尾市佐久島, 2017年6月24日, 木村昭一採集

【分布の概要】

【県内の分布】

県下では、佐久島(早瀬・木村, 2019)、日間賀島、伊良湖(早瀬・他, 2019)で生息が確認されている。

【世界および国内の分布】

タイプ産地は紀伊半島(Taki, Is. & Taki, Iw., 1929)で、房総半島から九州の潮間帯から潮下帯の砂底上の転石下に分布する(齋藤, 2000, 2017)。瀬戸内海にも分布する(稲葉, 1982)。日本以外からの分布記録はない。

【生息地の環境／生態的特性】

外洋に面した内湾の、潮通しの良い、砂泥底上に転石が多い潮間帯に生息し、本種が生息する海域は他の貝類の多様性も高い。早瀬・他(2019)では、過去の記録との比較から、潮間帯の埋没石や転石下に生息する小形～微小種は、水質汚濁、底質環境の泥質化、有機物量の増加、貧酸素の発生等により著しく多様性が失われることが考察されている。生態的特性についてはほとんど知られていない。

【現在の生息状況／減少の要因】

生息状況は、【選定理由】・【分布の概要】を参照。本種の生息できるような生息環境自体が減少しており、これが最も大きな減少要因と考えられる。

【保全上の留意点】

現在本種が生息確認される海域の環境を維持することが重要である。特に、本種の生息基盤としての前述したような生息環境を保全することが重要である。

【特記事項】

本種は、サメハダヒザラガイ科としては比較的分布域が南方で、生息水深も非常に浅い。サメハダヒザラガイ科には北方系や深海性の種が多く、冷水系の種群である。本種も稲葉(1982)が東北・北海道型と定義した、「内海が太平洋側の分布限界である、外海では生息し得ないが、低温・低塩分の内海に生息している貝類群集」に含まれる種と言えるかも知れない。

【引用文献】

- 早瀬善正・木村昭一・西 浩孝・守谷茂樹・岩田明久, 2019. 日間賀島(三河湾)の潮間帯貝類相. かきつばた, (44): 1-15.
早瀬善正・木村昭一, 2020. 佐久島(三河湾)の潮間帯貝類相. ちりばたん, 50 (1): 33-79.
稲葉明彦, 1982. 瀬戸内海の貝類. 181pp. 広島貝類談話会, 広島.
木村昭一・早瀬善正・河辺訓受・矢橋 真・林 誠司・河合秀高, 2015. 鳥羽市麻倉島のヒザラガイ類相(観察調査会報告). かきつばた, (40): 17-22.
齋藤 寛, 2000. サメハダヒザラガイ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑. pp. 4, 5. 東海大学出版会, 平塚.
齋藤 寛, 2017. サメハダヒザラガイ. in: 奥谷喬司(編著) 日本近海産貝類図鑑. pp. 46, 728. 東海大学出版会, 平塚.
Taki, Is. & Taki, Iw., 1929. Studies on Japanese chitons (3). Venus 1: 157-164.

(木村昭一)